



地建の説明を次に要約する。

問一 地区民の願いは河口での砂の採取

を即刻止めようことに、浜の砂が無

くなったのは砂採取のせいではないか

答一 建設省は由良川治水に年十億円の

予算で取組んでいる。その基本方針は、

福知山より下流は川底を掘削することによつ

て沿岸を守る。これが原則だ。

由良川の河口は自然のまゝでは閉塞す

る。上流の水害防止のため常時河口では

水流五メートル幅百五十メートル確保する必要がある。

河口附近の砂の移動は複雑微妙で、

更に調査を続けると明かでないが、海

岸浸食は河口の砂採取とは直接関係がない。

原因糾明の上、最も有効な方案を別

に構すべきだが、これは地建の管轄外である。

問一 九月十九日の災害の真の原因是、

河口での砂採取にあると思うが

答一 そうは考えない。

間一 砂の採取を一時でも中止してもら

えないか。

答一 海岸浸食の原因が明らかに河口の

砂採取にあることが証明されないと

思えない。

許可採取された砂は約四万立方メートルとな

つている。(これは一〇×三×一三〇〇)

即ち河口より脇まで約一三〇〇メートルの海岸

で深さ三メートル十メートルの砂の体積となる。

十年間で百メートルの砂浜が無くなつたとすれば、ちょうど計算が合う。神崎海岸の消失

失分は、許可外採取の量と考えたり。

このまま浸食が進めば、あと五年、三

自然を取去つたら、果して何が残るだろ

うか。千数百年か、つづきずれに白砂

青松の海岸が、我々の世代にしかもに

つた二十数年間に合なしにするのを歎つて見ていれば、何が残るだら

海岸浸食は日本海一円の問題だとさう、

自らのことしか考えない経済成長が最大の原因ではないだろか。

今後とも河口での砂採取を中止してもらう

二、由良川沿岸の危険箇所、特に港地区

の堤防を早急に補修工事すること。

三、砂採取業者の方々に充分な補償を行

ふること。国の誤った施策のため、住民も被害者となり業者の方々も被害者である。今後は砂の販売を一切禁止して、止むを得ず河口で採取した砂は、脇や神崎の浜

河口の開塞防止にいくら使つてゐるのか

答一 一回も使つていない。

問一 国の事業を採取業者に無料でさせて

利益を上げたのをどう考えるか。

答一 そういう事実はない。

問一 砂の採取が上流の洪水防止のために

う、洪水の絶対にない十月から翌年の四月

までは、採取を止めてもよいのではないか、

又、少々河口に砂がにまつても、洪水にな

ると直ぐその水勢が押し流され、上流の浸

水に左程影響するとは思えないが、

答一 常時探つていなりと洪水に間に合わ

ない。又閉塞はそこ簡単には取れない。

おもそく以上のよろ地建調査課長の説明

を聞いて私は腹がたつて仕方がなかつた。

答一 常時探つていなりと洪水に間に合わ

ない。又閉塞はそこ簡単には取れない。

要するに地建は役所としては当然かも知

れないが、上流の洪水防止と砂採取業者

のことしか考えていない。我々は、自治会

を中心に更に強力な運動を展開しなければ

ならない。このまづかしい問題を私なりに

整理してみると

浜の砂は何処から来たのか

拂つ。

四河口の砂を採れば、その分だけ浜の砂が河口へ移動する。水が低い方に流れるので、川の両岸の堤防を延長する位置に導流堤を築くこと、現在のような地建の調査では、結論が直ぐ出ないし、之出す氣とも思えない。弊社やつてあることに、

以上四つの施設を取り敢えず早急に実施

することはないし、遂に業者が犠牲にならぬようなどもあつてはならぬ。しかし

河口での砂の採取がもう限界に来ている

ことは、業者の方々がよく知つておら

れるのではないにろう。調査の時期はも

う過ぎた。日本の沿岸の美しい海岸を取

り戻すために、今こそみんな立ち上ろう。

虚空蔵さんの石塚

山林一小枝子

初冬の惨事相次ぎ報道す

身辺のこと整理して冬ごもり

こま女

ざん花の哀れ一すじ紅引ける  
短日や昏れて通うぬ針のめど  
兩戸引く雨月の波の高まりに  
虫絶えて磯打つ波の音ばかり

朝な夕なに仰ぎ見るこの雄大な由良

岳の姿を、此如に生を受けた者は、遠

く故郷を離れて生活しましても、忘れ

る事の出来ない優雅を尋ね、心の奥深く

被めている事でしょう。

其の由良岳に登山された方なら、何

誰も御存知の虚空蔵様をおまつりして

ある小石の塚を御存じでしょう。私が

幼い頃に聞いた話を書いてみましよう

福井県の松尾山と脊比べしましたとこ

これはやはり由良川の上流からだ。その昔この地に先ず人が住みつけたのは石浦と脇で、現在の宮本、浜の路は石浦と脇まで山の麓を通りてゐる。由良川河口は以前脇にあつたとはよく聞く話だ。治水が進むまでは、河口は洪

水の度に大きく移動し、人は漸く山すて來た砂礫が沖へ流れられ、波ごうち返され、滯積したのが、現在の宮本、浜の路、浜地区である。脇部落は歴史古く、独自に奉眞神社を持つてゐる。それをみて明かだ。

戦後なぜ浜がなくなつたか

第一に由良川上流の治水が進んで大砂止めが造られ、砂礫が流れ来て東みなみが数千年の間に、洪水が上流から流れ込んだ。第二に福知山より下流の至る處で、川砂利の採取が行われ、下流を中心に更に強力な運動を展開しなければならない。このまづかしい問題を私なりに整理してみると

浜の砂は何処から来たのか

年五月から約一年間に由良川河口で

昭和47年12月

う、由良岳が少々低いので松尾山より高くして呉れたう望みは叶えてやうとの事で、十三才になりますと、男ども女ども小石を十三拾つて持つてお詣りしたものです。其の小石があの様に築き、虚空の様をあまりしているのですけれど、それを築いたお節さんは、何如其如の何兵衛のお節さんと、祖母が言つて聞かせて呉れましたけれど覚えていません。何かの縁日に、お婆さんが「ボタ餅」今まで言う「おはぎ」をこしらえて裏箱に詰めて、お節さんの喜ぶ顔を見たさにエッ子ラ、オツチラと登つた事でしょう。「お節さん。好きなボタ餅をこしらえて持つて来たから腹一杯食べな」「オ、お前がナ」と知つていろゾ。なんぼ好きなボタ餅でござ、いくら言い分けしても聞いて貰えねど、そんなお節さんのいいナ、とお持つて来た重い包を仕方なく持つて下山しました。お節さんは石を積み積み手拭とかぶつた婆さんの姿を追ひ追ひあゝここまで降りた降りたと見ていました。どうぞ我が家へ這入つて行くのを見て

## 正しい選挙で大きな平和を

一有権者

あ、又選挙がうろさいなあ！ 誰か当選しようが無関心同じ事ということを耳にします。

ほんとにそうだと思います。自分勝手な理諭論を気軽に公約される候補者、詰より顔を見て、います。どんな気持でしゃべつていられるか想像して、にが笑いしくなります。みなさん、わからぬながらも甘い口上に頼らないで、身近な所より一步二歩と自分の努力によります。ほんとの楽しみ、章を書き上げてこそ、ほんとの楽しみ、章せが生れてくるのではないでしようか。努力もしないで福祉問題を叫んで居られる方々、お金の出所を考へて居られるかもしれません。国民の汗と油の税金です。いろいろと分業により国家は成立していると思います。農工商といろ／＼と分かれていますが、仕事、働くことは同じです。理諭論にとらわれず、私達の日常生活に直結したあらゆる面の意識を広めて、必ず足をしつかりと地につけ、由良地

区のため務めましょう。小さな平和より一步大きな平和に前進するよう努力致しましょ。

0 0 0 0 0 0 0

ある予言者の詩

誰もしらなかつたし、我々は春を待つていたのに遅かつた春のために蒔いた種は、そのまゝ凍つて我々は死んだ種それを口に入れただけで、その種は死んだ誰もしらなかつたし、我々は春を待つていたのに遅かつた春はこなかつた春は死んだ種を掘かえして死んだ

夜、ベットにはり

霜が凍りついた大地は、また、誰もしらなかつたし、大地を開いた

我々は海に出て、丁度いつたが止まなかつた

小舟をうかべて、釣つた魚は赤くにごつて、いた

我々はかたゆの魚を口にいれて泣いた

子供たちが腹をくにしつけて、いつた

(四十七年七月NHK宇宙船地番号より)

キツネが内の婆さんに化けていたものと思ひこんでいたが、本当の内の婆さんであつたのか、惜い事をしたと思つたとの事でした。

## 郷土をさぐる会

中西俊夫

あちこちにできている郷土研究グループをみると、それぞれに郷土史については専門の人達の集りのようですが、私たちの会は、その名にも示しますとおり、一二の先輩をのぞばずぶの素人ばかりそれでも、目標だけはざつかく……この由良の先人たちが、どのように暮して、いくつも生きときにかをさぐり、私たちが引継いで守つていかねばならないもの、またこれ等のことを私たちの生活をよりよくするのに、どう生かしていくば、等々課題としてとりくんではありますものの、何百何千年といつた奥の深い学習だけに、たゞ五里霧中、手でさぐり、さぐり、ようやく半年の間歩いてきました。

この間、由良の古墳のこと、あるいは七曲八峠との近辺の遺跡について、また古くから伝わる伝説や昔話の聞き集め

これは、由良で何かあるときには、いつも白いひげのおじいさんが出るという話の一つで、このことは、白鬚神猿田彦の信仰に関連しにものではない。今から思うと、白ひげのあじいさんの手よねさしに所は、安全を場所たつたような……

そのまゝ我々は春を待つてこなかつた春は誰もなかつたし、鳥はこなかつたそれが草をふくのを待つて、我が家の祈りが通じて、それがひとりひとりは別々の星をついた時、それはまた、だれでいた水はすみ、しかし鳥はこなかつた人々は町のあちらこちらに花の種をうえにしたひとたまりになつて、いたがひとりひとりは別々の星をついた時、その日は静かに近づき、あつたた誰も呼ばなかつたし、誰も江かなかつた街角の曲りどごのまゝ死んだのはお前だ、そのまゝ死んだのはお前だ、お前はそのまま生れて、くずれ落ちた

いくつもの九体が、朝になつて起きて来るといふと生き、まゝの姿で、あちこちでいた、その日がとく／＼やつて來たのだ、また最初に生きはじめたのは右脚にそえさせて、松葉杖をついた老人たつたもくんだ、中年の女が、あとに続いた、そして、あちの街角から